

田中先生の懸命な活動に学ぶ

(京都産業大学名誉教授) 所 功

百年前に誕生された田中卓先生は、五年前に九十五歳近くまで多様な活動を続けられた。

《日本上古史の研究》、まず敗戦直後(21歳)東大を卒業して郷里の大阪へ帰り、昭和二十五年(一九五〇)から大阪社会事業短期大学の教官(講師・助教授・教授)となられた。

そして古典史料を活用した古代・上代の研究で多大な業績を公表され、同三十五年(一九六〇)三十六歳で國學院大学から文学博士の学位を授けられている。

《學館大学の教授》について、同三十七年に開設された

「學館大学」の國史学科教授となられ、伊勢へ移住し

て、苦勞の多い文学部長と学長を通計十五年間も務め、平成六年(一九九四)七十歳で定年退職された。

その間に多くの人材を育てられ、また研究促進のため

学内に出版部や史料編纂所を開設するなど、アカデミックな学府の基礎を築かれた。

その師弟とも、日本は歴代天皇のもとで多くの国民が和

合してきた「皇國」と認識される。しかも、それを觀念的に讚美するのではなく、幾多の危機を克服するために

命懸けで努力する先人(忠臣義士たち)により護持されてきたことを確認し、自ら実践してこられた。

とりわけ、記紀などを徹底的に研究して日本の建國過程を実証された。それにより昭和四十一年(一九六六)

「国民の祝日法」の改正に伴い「建國記念の日」を特定する審議会に、古代史の専門家として招かれると、明確な構成意見を堂々と公述しておられる。

また、皇統承統のためには、皇位継承者を皇統の男系男子に限定せず、皇族の身分にある女子も公認しておくべきだ、と強く主張されている。

叙上のような御事績に一貫しているのは、常に為すべきことを考えて全力で取り組む眞剣な生き方である。

今回、國民會館の格別なご高配を賜り開催した「学び集い」では、その一端を解明し共有することができた。

(令和五年十二月十二日記)
(日本学協会・藝林会顧問 國民會館理事)

《伊勢青々塾の塾頭》しかも先生は、大学の多人教育で十分に為しえない「志を鍛える道場」が必要と考え、私費を投じて同三十九年(一九六四)「伊勢青々塾」を、自宅近くに設立された。それから、平成六年(一九九四)まで三十年余り塾頭を務めておられる。

その開塾に際して、私は塾頭代を仰せ付けられた。そこで先生から、日常雑務の処理方法なども懇切に教

えて頂いた。また皇大の教員に採用されてからは、どれほど忙しくても、本務の授業などに精励しながら、若い人材を育て多くの有志と事を為し遂げる眞摯な取り組

みの大切さを、間近に学ぶことができた。

《日本教師会の会長》日本教師会は、敗戦後の「教育正

常化」を目指して同三十八年(一九六三)正式に発足し、田中先生が初代会長として東奔西走された。

その十五年余り(39歳〜56歳)、研究に専念できなかつたが、先生にとっては、個人の業績よりも祖国の教育

正常化こそ宿命と覚悟されていたのであろう。

《皇國護持》への貢献》先生は、戦時中から東京帝國大学で平泉濤博士(國史学科主任教授)に師事された。

《参考資料》

田中卓博士「長期的展望に立つ『眞の祖国再建』」抄

わが国の「万世一系」の誇りは、皇族内の男女性別の問題よりも、「君臣の義」の正さにあり、建國の英主

神武天皇以来千数百年間、臣下が皇位を覬覦する革命を一度も見なかつたという事実です。大切なことは、國民

が「懸關」の精神を堅持することです。

御室制度の許されない現代に、「必ず男系男子」という無理な過去の慣例を、伝統と称して論じても無意味です。実情に合わないほどハードルを高くすれば、必ず躓き

がおき、天皇制廃止論者を利するだけのことでしよう。今回の改正では、歴史の智慧に学んで「女帝」の可能性も認め、四世内の「皇親」制を定めて、その中に女性

宮家も含め、「皇親」の範囲内からの「養子」制も容認

することで暫定的に納め、本格的な『皇室典範』の改訂

は、将来、現在の皇太子殿下が天皇となられた暁に、その勅諭をうけて慎重に行われればよいと思います。

(初出『諸君！』平成十八年二月号。同年十二月、青々企画、田中卓評論集4『祖国再建』下所収)